

< 結果の概要 >

1 出生

(1) 出生数は9,780人で、はじめて1万人を割り、前年より244人減少し、過去最低となった。

出生率（人口千対）も過去最低の8.1であった。

昭和49年以降減少傾向にあり、平成11年以降は1万1千人を割り込んで推移している。

母の年齢階級別出生数

(2) 出生数を母の年齢（5歳階級）別にみると、20代の出生数が224人減少しているが、30歳代後半及び40歳代では増加している。

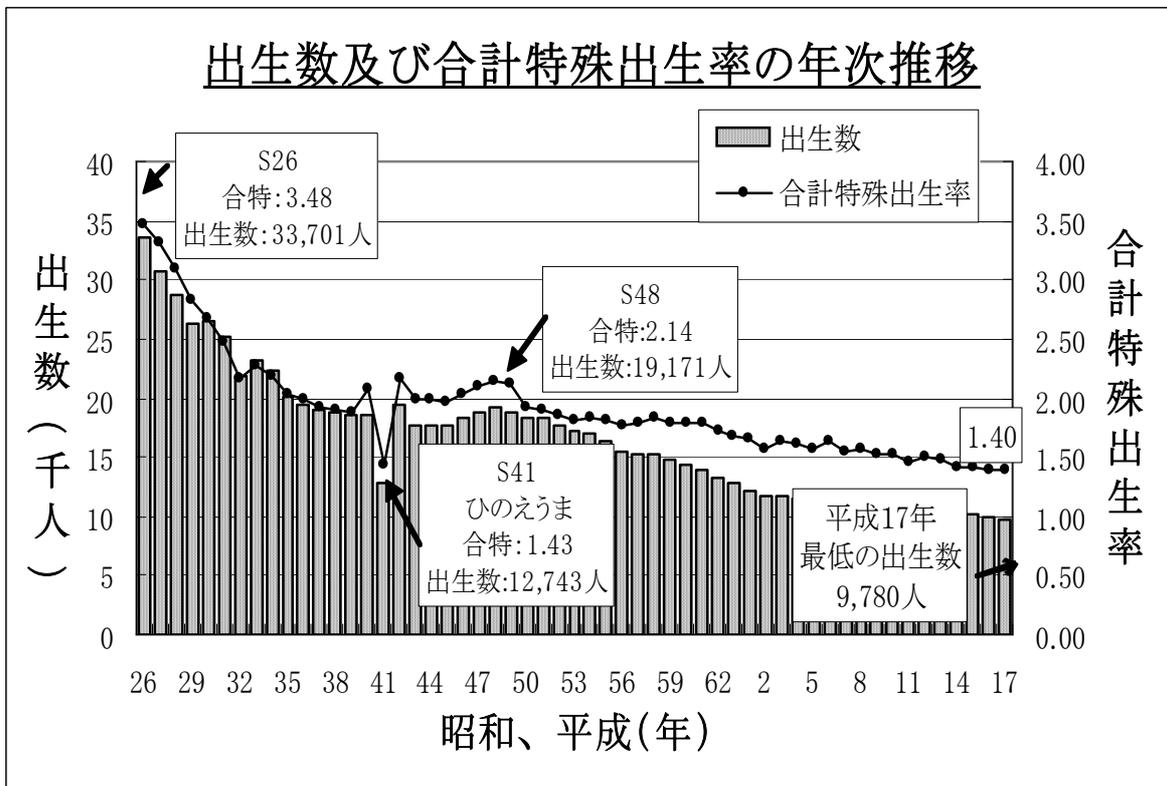
年齢階級 (歳)	出生数(人)	
	16年	17年
～14	0	0
15～19	176	169
20～24	1,379	1,411
25～29	3,593	3,337
30～34	3,464	3,404
35～39	1,259	1,282
40～44	150	173
45～49	3	4
計	10,024	9,780

2 合計特殊出生率

合計特殊出生率は、1.40で前年の1.40と同率となった。

その年次推移を見ると、昭和50年以降低下傾向にある。

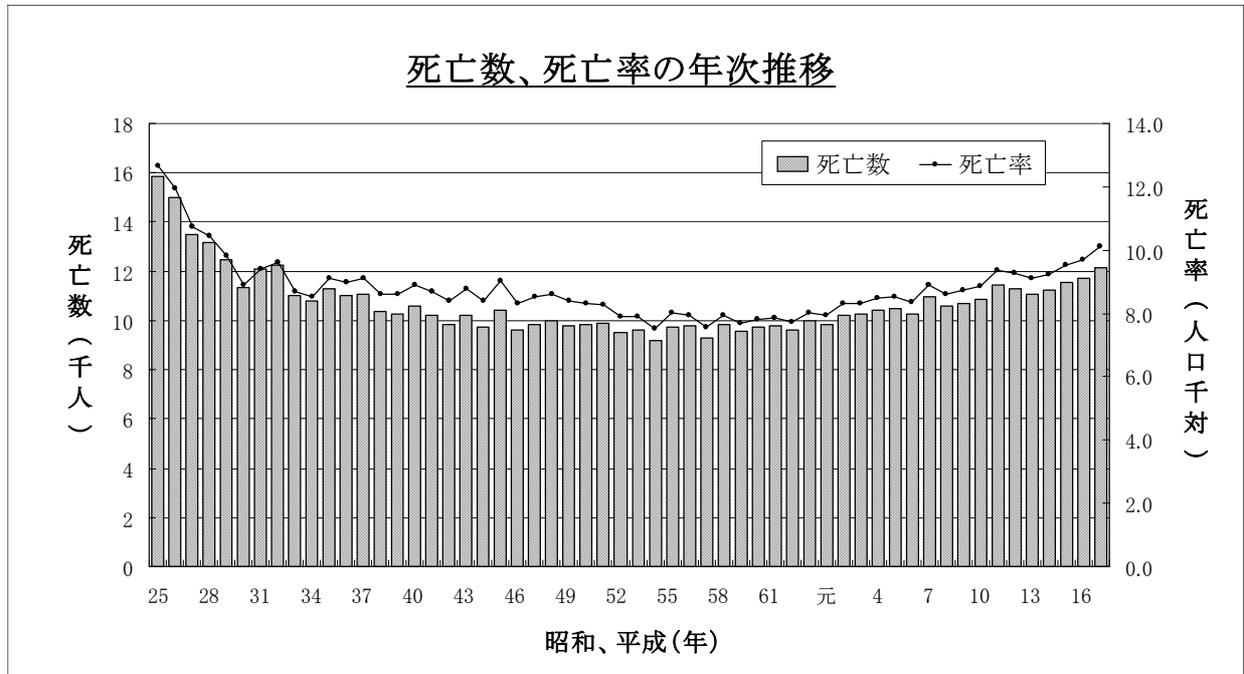
なお、全国の合計特殊出生率は前年より0.03ポイント下回り、1.26であった。



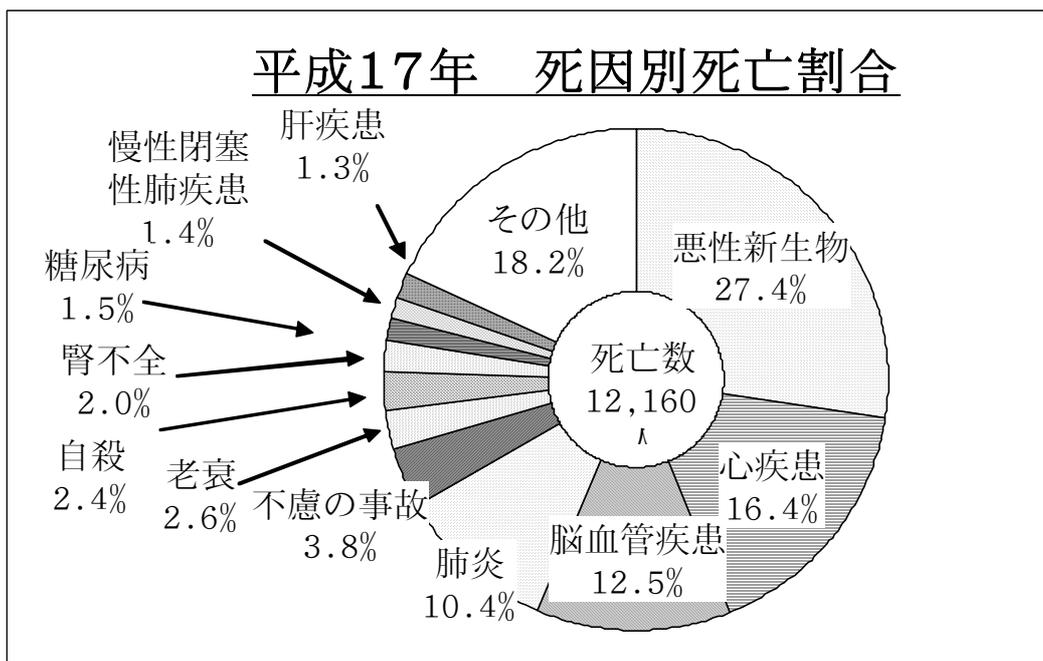
3 死 亡

(1) 死亡数は、12,160人で前年より427人増加した。

死亡率（人口千人対）は、10.1で前年を上回り、その年次推移を見ると、昭和50年代後半以降、上昇傾向にある。



(2) 死因順位についてみると、第1位は悪性新生物（27.4%）、第2位は心疾患（16.4%）、第3位は脳血管疾患（12.5%）で、この3大死因が、死亡数の約6割（56.3%）を占めている。



*人口10万対

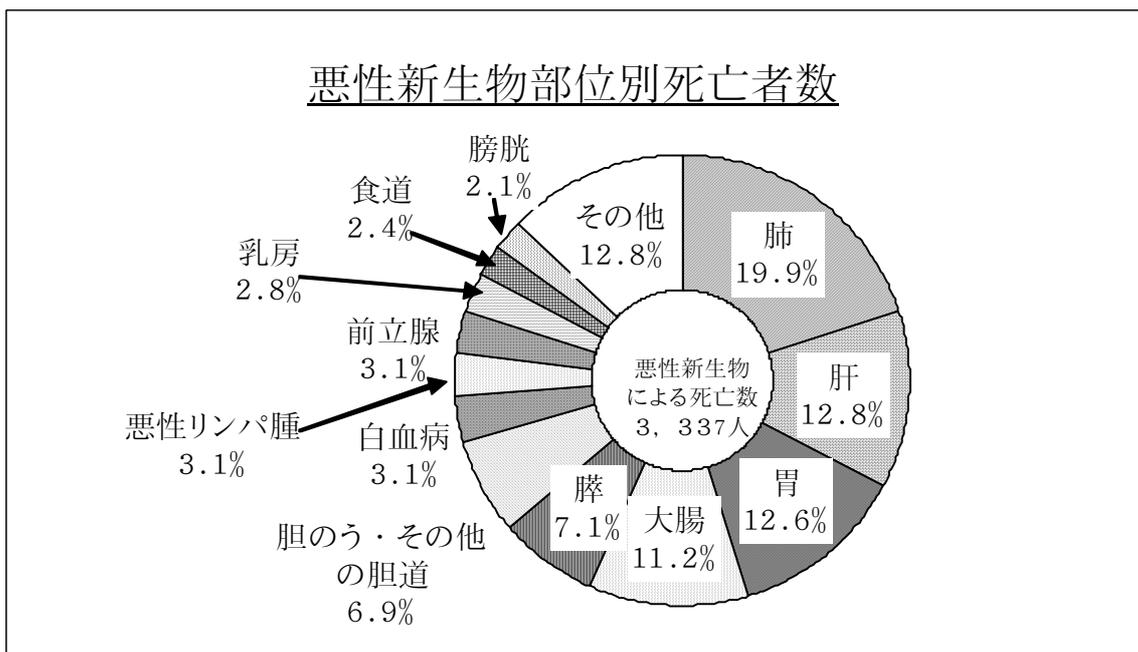
また、死因別死亡数を前年と比較すると、減少したのは、悪性新生物（211人減）、自殺（29人減）、慢性閉塞性肺疾患（15人減）などであり、増加したのは、心疾患（200人増）、肺炎（143人増）、老衰（77人増）、脳血管疾患（61人増）などである。

主な死因別死亡数・死亡率

死 因	平成17年				平成16年			対前年比	
	順位	死亡数	死亡率	割合	順位	死亡数	死亡率	死亡数	死亡率
全 死 因		12,160	1011.1	81.8		11,733	971.3	427	39.8
悪性新生物	1	3,337	277.5	27.4	1	3,548	293.7	△ 211	△ 16.2
心 疾 患	2	1,994	165.8	16.4	2	1,794	148.5	200	17.3
脳 血 管 疾 患	3	1,523	126.6	12.5	3	1,462	121.0	61	5.6
肺 炎	4	1,263	105.0	10.4	4	1,120	92.7	143	12.3
不慮の事故	5	461	38.3	3.8	5	454	37.6	7	0.7
老 衰	6	315	26.2	2.6	8	238	19.7	77	6.5
自 殺	7	292	24.3	2.4	6	321	26.6	△ 29	△ 2.3
腎 不 全	8	242	20.1	2.0	7	240	19.9	2	0.2
糖 尿 病	9	182	15.1	1.5	10	145	12.0	37	3.1
慢性閉塞性肺疾患	10	176	14.6	1.4	9	191	15.8	△ 15	△ 1.2
肝 疾 患	11	164	13.6	1.3	11	135	11.2	29	2.4

※死亡率:人口10万対。

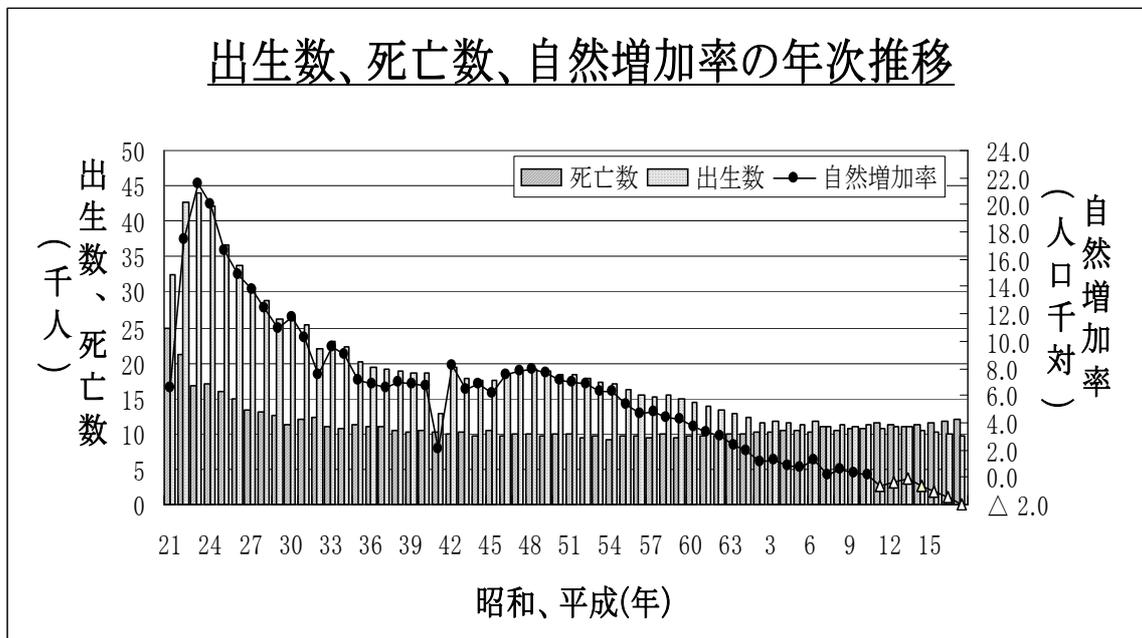
なお、悪性新生物の部位別の死亡順位を見ると、肺がん（19.9%）を筆頭に、肝がん（12.8%）、胃がん（12.6%）、大腸がん（11.2%）と続き、この4つで悪性新生物の56.5%を占める。



4 自然増加

自然増加数（出生数－死亡数）はマイナス2,380人で平成11年以降、死亡数が出生数を上回る自然減の状態となっている。

自然増加率はマイナス2.0と前年のマイナス1.4より減少幅が拡大した。



5 乳児死亡

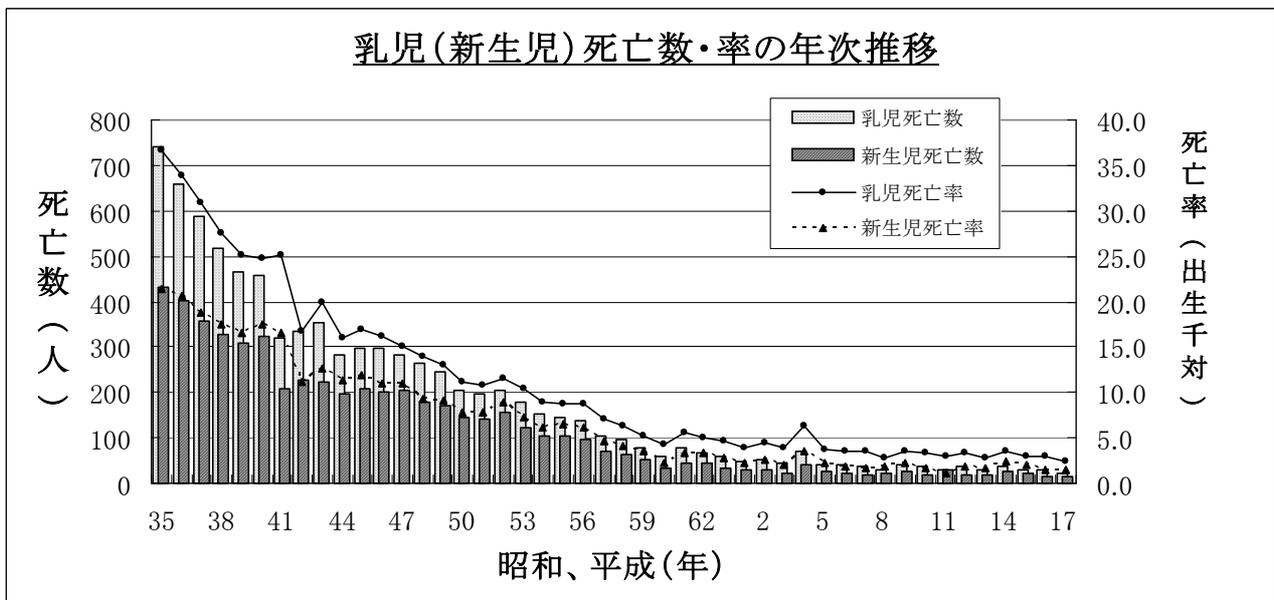
生後1年未満の死亡である乳児死亡数は、23人で前年より6人減少した。

乳児死亡率（出生千対）は、2.4で前年の2.9を下回った。その年次推移をみると、昭和60年までは急激に低下し、その後は、上昇と下降を繰り返しながら、平成5年以降ほぼ横ばいに推移している。

6 新生児死亡

生後4週未満の死亡である新生児死亡数は、14人で前年より1人減少した。

新生児死亡率（出生千対）は、1.4で、前年の1.5を下回った。その年次推移をみると、乳児死亡と同様の傾向で推移している。

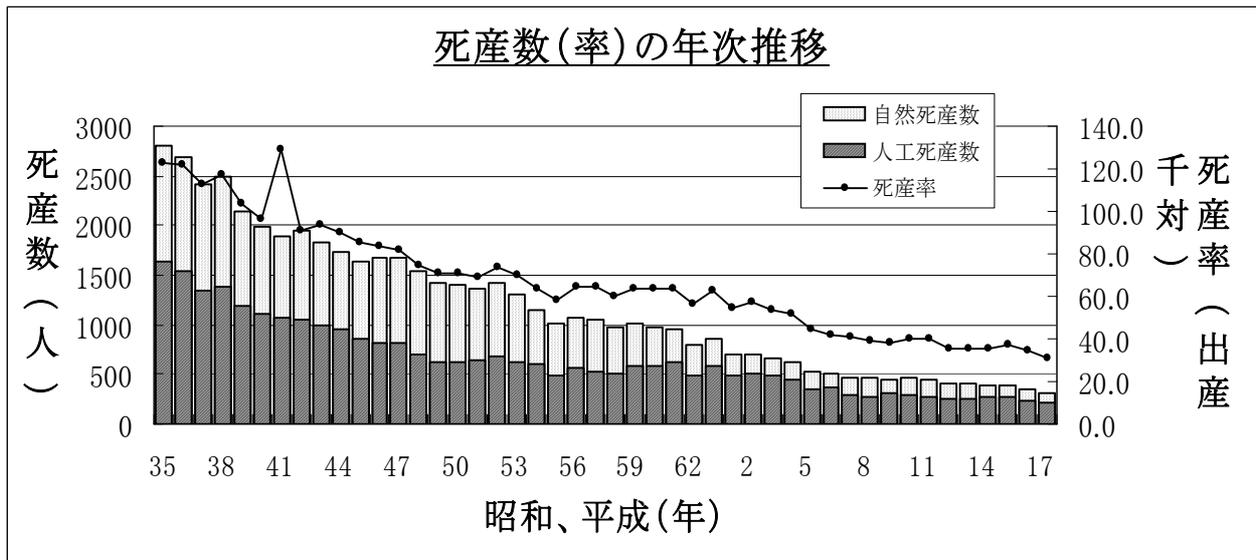


7 死産

死産数は、308胎で前年より47胎減少した。

その内訳は、自然死産95胎、人工死産が213胎となっている。

死産率（出産千対）は、30.5で前年の34.2を下回り、増減を繰り返しながら、減少傾向にある。



8 周産期死亡

妊娠満22週以後の死産に、生後1週未満の早期新生児死亡を加えた周産期死亡数は、37（胎・人）で前年より9（胎・人）減少した。

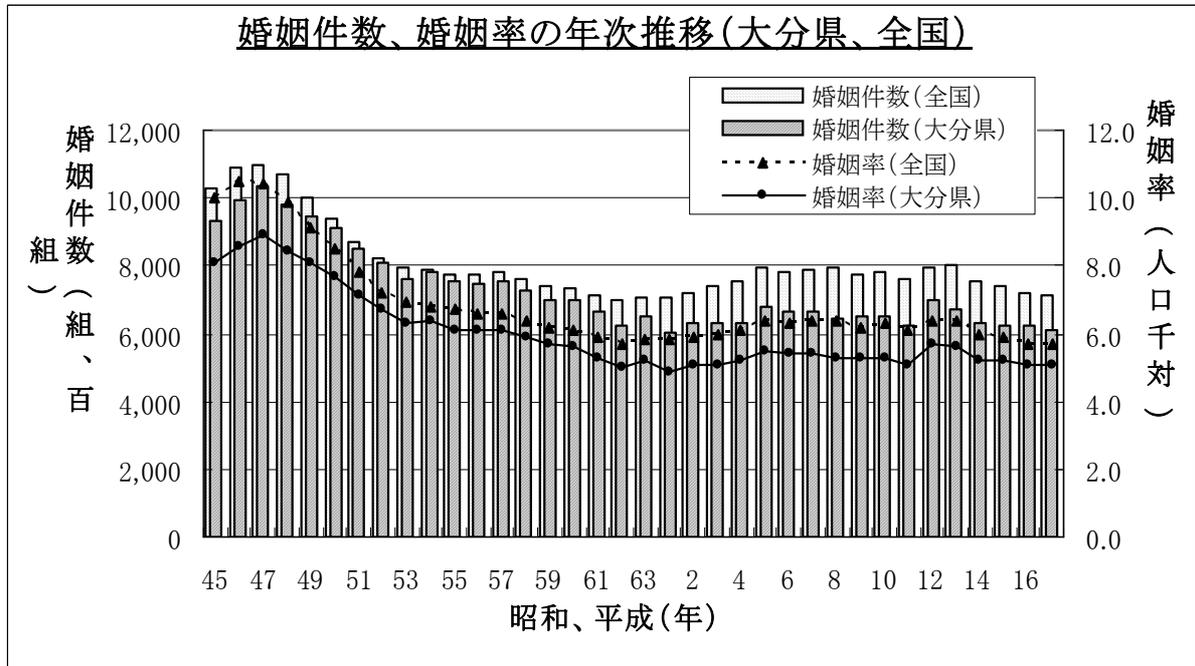
その内訳は、妊娠満22週以後の死産が27胎、生後1週未満の早期新生児死亡が10人となっている。

周産期死亡率（出産千対）は、3.8で前年の4.6を下回った。

9 婚 姻

婚姻件数は、6,101組で、前年より22組減少した。

婚姻率（人口千対）は、5.1で前年と同率であった。その年次推移をみると、昭和48年以降低下を続けた後、平成に入ってほぼ横ばいに推移している。



なお、平均初婚年齢は、夫29.1歳、妻27.8歳であった。

夫については、平成に入ってほぼ横ばいであったが、平成13年以降上昇傾向にある。妻については、穏やかであるが、毎年上昇が続いている。

平均初婚年齢の年次推移

	夫		妻	
	大分県	全 国	大分県	全 国
平成3	28.2	28.4	26.0	25.9
4	28.2	28.4	26.0	26.0
5	28.2	28.4	26.1	26.1
6	28.2	28.5	26.1	26.2
7	28.2	28.5	26.2	26.3
8	28.2	28.5	26.3	26.4
9	28.1	28.5	26.3	26.6
10	28.1	28.6	26.5	26.7
11	28.0	28.7	26.6	26.8
12	28.1	28.8	26.7	27.0
13	28.4	29.0	26.9	27.2
14	28.4	29.1	27.1	27.4
15	28.8	29.4	27.4	27.6
16	29.0	29.6	27.5	27.8
17	29.1	29.8	27.8	28.0

10 離婚

離婚件数は、2,382組で前年より209組減少した。

離婚率（人口千対）は、1.98で前年の2.14を下回った。

離婚件数・離婚率とも、平成15年以降3年連続で減少した。

